

氏名 塚本 江美

学位の種類 博士（地域研究）

学位記番号 国博甲第4号

学位授与の日付 平成28年3月20日

論文題目 アメリカ北部都市の居住区における「人種」隔離  
—ミルウォーキー、ニューヨーク、シカゴ、デトロイトを事例  
都市として—

審査委員 主査（教授）上村直樹

（名誉教授）竹中興慈（東北大学）

（教授）川島正樹

（教授）牛田千鶴

## 1. 論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）北部諸都市で一般に見られる、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系を主たる住民とする居住区における事実上の「人種」（本稿では生物学的概念として否定された後も「社会的構築物」としての圧力を有するカテゴリーとしての意義を強調して引用符を付して使用される）に基づく隔離に関する諸問題を研究課題としている。序章で述べられているように、具体的にはミルウォーキー（ウィスコンシン州）、ニューヨーク（ニューヨーク州）、シカゴ（イリノイ州）、デトロイト（ミシガン州）という、最新の政府統計における主に黒人と白人の「人種」隔離指数において上位の大都市圏中心都市としてランクされる四つの事例を取り上げ、アメリカ大都市中心部で顕著な居住区隔離の生成過程を明らかにし、その本質的問題と原因を別掲し、解決の方途を模索する論考である。方法論的には主に歴史学的な通時的な研究手法に依拠しつつ、適宜その折々に蓄積されてきた社会学的な共時的モノグラフや、最新の人口動態研究と政府等の統計資料の分析、さらには現地調査も取り入れつつ、学際的で総合的な地域研究の方法を駆使して、アメリカ都市研究として取り組まれている。

本論文の特色は、アメリカ北部の都市部における「人種」に基づく居住区の隔離問題に関して、先行研究において豊富な蓄積のある社会学的研究の知見を活かしつつ、必ずしも十分とは言えない通時的・歴史的アプローチを用いて主要 4 都市における住宅隔離の原因を類型化し、検証することによって、住宅隔離における連続性と変化とを浮かび上がらせ、黒人が主流社会において不可視化された構造的な問題に焦点を当てた点にある。本論文は、各章の冒頭で各都市の分析における個別の作業仮説を設けているが、全体を貫く仮説として、ダグラス・マッシーやウィリアム・ウィルソンらの社会学者による代表的な先行研究に依拠しつつ、（1）現代まで続く「人種」隔離問題は、白人の個人的な偏見や差別感情を助長させるような、伝統的な集団的信念・利益の現状維持を目指す主流社会に原因がある、（2）歴史的に経済活動の末端に追いやられてきた黒人は、経済的変化の影響を最も受け、白人・黒人間の経済格差は維持・拡大しており、隔離は「人種」差別構造と経済格差を再生している、という点についての歴史的説明を目指しており、各章を通じて 4 都市それぞれについての豊富な実証的研究を基にこうした点が検証され、そうした検証を踏まえて最後に「人種」に基づく住宅隔離問題の解決のための課題が検討される。以下、各章の内容を説明する。

第 1 章では最新の政府統計において最も隔離の激しい都市とされているミルウォーキーに焦点が当てられる。南部農村部から北部の工業都市への黒人の所謂「大移動」は一般に 1910 年代から 60 年代にかけて起こったとされるが、ウィスコンシン州最大規模の都市でありながら、大規模な工業化が伴わなかった同市において、黒人人口の増加が目立つのはかなり遅れ、1960 年代半ばに高揚した市民権運動の一端として、ようやく住宅隔離の解消が問題化し始めた時期以降に本格化した。従来ドイツ系住民が主流を占め、リベラルな政治的伝統があると見なされる傾向にあったミルウォーキーではあるが、他の北部都市と同じく、黒人住民の流入が顕在化するとともに黒人が集住する視覚的にも隔離状況が明らかなる差別と貧困が集中化する集住区としての「ゲットー」が確立され、市内中心部から郊外への白人住民の転住傾向が促進され、中心部の差別と貧困の問題がより深刻化するという、北部の他の都市で一般に起こった歴史的パターンが遅れて見られていることが確認される。何よりも注目すべきは、このパターンが連邦政府による差別禁止と隔離是正を企図する強力な立法措置が相次いでなされた 1960 年代以降に顕在化した点である。それは後の章でも論じられる、従来の他都市の研究でしばしば指摘されてきた都心部の脱工業化による職なし状況の深刻化のみでは語り尽せない、住宅隔離の生成過程における白人主流社会に深く根差した肌の色にまつわる偏見による歴史的な社会的圧力の強さを物語るのである。確かにミルウォーキーでも 1960 年代半ばにイタリア系白人神父に率いられた市民権運動の高揚期に一時的に主流市民において住宅隔離の問題への関心が高まった。しかしながら、長らく人的少数派のままであった黒人住民側には十分な政治力を蓄積するほどの組織的団結が図られることなく、その後地元社会において世論の関心は低下し、抜本的な対策が講じられることなく放置されてきた。21 世紀の開幕後に意欲あふれる非白人系、とりわけ黒い

肌の移民が流入するようになるに至って、黒人住民の間に組織化の動きが見られ始め、地方政治への積極的参入の機運が芽生え始めている。今後の展開が注目されるのである。

第2章では、アメリカ最大の都市であり、視覚的にも多様性あふれる移民の流入が続く世界都市の典型でもあるニューヨークにおける、とりわけ近年の学術的関心が集まる黒い肌の移民の二世に焦点が当てられる。かつて奴隷とされた黒人たちも特殊な移民であったが、1965年以降に急増したカリブ諸国や西アフリカからの黒い肌の移民は比較的に学歴が高く向上心に満ちた、社会的に評価の高い人々である。近年、社会学者が盛んに論争するのはこうした第二世代における、とりわけ社会経済的な意味合いにおける「同化」である。M・C・ウォーターズらは黒い肌の移民の高い確率での上方同化の傾向に注目する一方、A・ポルテスらは「下方同化」の圧力の高さを指摘する。本論文筆者の見解は、確かに前者が言うように親たちのエスニック文化を保持しつつアフリカ系アメリカ人の「アンダークラス」の好ましからざる価値観への「同化」を拒みつつ社会経済的に主流への上方同化を達成する者が少なくない事実を否定できないと一定程度認めつつも、他の多くの状況を鑑みて後者の「下方同化」説がより妥当であるとする。第三世代までに白人と同様の割合で概ね主流社会への同化を果たす非黒人系の他の移民集団と違って、アメリカ社会には黒い肌の人々だけに主に作用する「下方同化」というもう一つの社会的同化圧力が歴史的に根強く残っている事実が浮き彫りにされるのである。本章の最後で、この間に旧来のアフリカ系アメリカ人たちの中にはその学歴や社会経済的な階層にかかわらず、南部への回帰の傾向が顕在化しつつあることにも触れられる。ニューヨーク黒人社会においては、様々な母語を持つ黒い肌の移民集団の流入による多様化とそれと重なる旧来の住民における南部回帰傾向が見られる。とりわけ黒い肌の移民二世への「下方同化」の圧力に象徴される、黒人一般に対する主流社会からの偏見と差別の持続の問題への本質的な対策が望まれる、と結ばれる。

第3章では60年間で総計650万といわれる南部から北部への「大移動」期に望まじき終着地とされながら、住宅をめぐる隔離にまつわるあらゆる問題の典型例とされるシカゴと、かつて全米を代表する自動車産業の都市として白人が8割を占めた200万近くの人口を有しながら、現在は総人口が80万人を切り、大半が貧しい黒人であり、2013年に財政破綻の宣告を受けたデトロイトに焦点が当てられる。本章では、居住区隔離にまつわる差別と貧困の集中がきたす深刻な社会問題が単に黒人住民のみならず主流社会にも影響を及ぼしている事実が浮き彫りにされるとともに、地域独自の果敢な問題解決努力の事例が分析される。まずシカゴで取り組まれるのは「ゴートルー・プログラム」に象徴される都市中心部のゲットーから脱出を望む住民への支援プログラムである。その効果は追跡調査によれば、移動先で「アンダークラス」の負の要素はかなりの程度において払拭されることが明らかとなるなど、その効果が確認される一方、この方策の対象者数は限られており、残された大半のゲットー住民の問題はより深刻化しているという問題が指摘される。近年では改良住宅の建設などゲットー地区それ自体の外観の改善努力にも予算が傾注されているが、住民の経済的な自立を含む自助努力促進の諸方策が伴う必要性が顕在化している。この点で2014年に大半の黒人住民の支持を背景に40年ぶりに誕生した白人市長であるマイク・ダガンが率先するデトロイトにおける、画期的というべき中心部再生の取り組みは注目に値する。破綻に瀕したデトロイト公立病院の財政再建に経営的手腕を発揮して評価されて市長に就任したダガンは、非白人系を主とした新移民の市内中心部への誘致策や、高級腕時計組立工場をはじめとする起業への援助と住民への職業訓練など、次々と意欲的な都市中心部再生と住民支援の試みを実行して全米の注目を集めている。ちなみに彼はデトロイト市と姉妹関係にある豊田市の有力企業から多額の寄付金を集め、この諸事業に活用している。

終章では4都市の事例研究をもとに、非白人系民の流入と中心都市の再開発傾向の中で旧来の「アンダークラス」の苦境が新たに深刻化すると同時に、その解決の機運も高まっているという注目に値する最新状況が確認されている。アメリカの都市における「人種」という名の外見上の違いに基づくと同時に著しい経済的格差を伴った居住区隔離の問題は、グローバル化の進行で多様性が高まる日本を含む世界各国に共通の問題となりつつある。多様な人々の共生の実現の方途の模索が望まれる、と結ばれる。

## 2. 論文審査の結果の要旨

公開最終試験において、塚本江美氏から論文全体の概要の説明がなされた後に、審査委員から質問やコメントが寄せられた。まずこの分野における我が国の権威の一人というべき学外審査委員から、全体的に膨大な資料を分析しつつ、効果的にコントロールされた高水準の論文に仕上がっているとの好意的な感想が述べられた上で、本論文で使用されるアフリカ系アメリカ人・黒人・黒い肌の移民といった用語の使用区分においてやや混同が見られる点が指摘された。学内審査委員からも同様の高評価がなされた後に、ニューヨークにおける黒人系移民の流入と旧来のアフリカ系アメリカ人の南部回帰傾向との関係、黒人移民と違ってエスニック文化という「下方同化」への防波堤的要素を欠くアフリカ系アメリカ人にとって「上方同化」の方途はどう展望できるのか、「人種隔離」はアメリカ特有の現象なのか、といった研究課題の本質に関わる質問が提起された。これらに対する塚本江美氏の応答は極めて明快かつ説得的であり、長年にわたる学術的な研鑽のあとを感じさせるものがあったと同時に、現在携わる国際交流事業関連の業務にこの研究成果を生かそうという熱意にあふれるものでもあった。

続く非公開の審査委員会において「国際地域文化研究科学学位論文（修士論文・博士論文）審査基準」に則り、慎重かつ厳密な審査と評価がなされた。まず論文の体裁および論旨の展開は大変に明快であり、この点に関して審査委員全員一致で非常に高い評価が下された。次に先行研究への言及と文献の利用に関しては、参照された先行研究の量は十分であるがその批判的な利用という点でやや不足感が否めないものの、膨大な統計資料を含む文献の渉猟と活用は大いに評価されるべきであるとのことで審査委員全員が一致した。学術的価値や独創性に関しても全員一致で高く評価すべきであるとの結論に達した。多様な人々の共生の方途の模索という課題はグローバル化が進行する我が国においても重要なテーマであり、学術的な貢献は高いと判断される。本研究は、旧来のディシプリンにまたがってあらゆる研究成果を動員しつつ研究課題として提起された問いへの答を模索することを目的として掲げる学際的な地域研究の一つの模範を示しており、本論文の出版を含む塚本氏の今後の学術貢献努力に大いに期待が寄せられる点でも審査委員の評価は一致した。加えて塚本氏がフルタイムで携わる国際交流関係の職業の傍らでこのような完成度の高い研究に仕上げた点にも評価の声が上がった。総じて本論文は博士論文としての水準に十分に達していると認められると判断される。

平成 28 年 2 月 19 日

審査委員（主査）（教 授）上 村 直 樹  
（名誉教授）竹 中 興 慈（東北大学）  
（教 授）川 島 正 樹  
（教 授）牛 田 千 鶴